

運

芥川龍之介

青空文庫

目のあらひ簾が、入口にぶらさげてあるので、往来の容子は仕事場にいても、よく見えた。清水へ通う往来は、さつきから、人通りが絶えない。金鼓をかけた法師が通る。壺装束をした女が通る。その後からは、めずらしく、黄牛に曳かせた網代車が通った。それが皆、疎な蒲の簾の目を、右からも左からも、来たかと思うと、通りぬけてしまう。その中で変らないのは、午後の日が暖かに春を炙っている、狭い往来の土の色ばかりである。

その人の往来を、仕事場の中から、何と云う事もなく眺めていた、一人の青侍が、この時、ふと思いついたように、主の陶器師へ声をかけた。

「不相変、観音様へ参詣する人が多いようだね。」

「左様でございます。」

陶器師は、仕事に氣をとられていたせいか、少し迷惑そうに、こう答えた。が、これは眼の小さい、鼻の上を向いた、どこかひょうきんな所のある老人で、顔つきにも容子にも、悪気らしいものは、微塵もない。着ているのは、麻の帷子であろう。それに萎えた揉烏帽子をかけたのが、この頃評判の高い鳥羽僧正の絵巻の中の人物を見るようであ

る。

「私も一つ、日参にっさんでもして見ようか。こう、うだつが上らなくちゃ、やりきれない。」

「御冗談ごじょうだんで。」

「なに、これで善い運さずが授かるとなれば、私だって、信心をするよ。日参をしたって、参籠さんろうをしたって、そうとすれば、安いものだからね。つまり、神仏を相手に、一商売をするようなものさ。」

青侍は、年相応な上調子うわちようしなものの言いをして、下唇を舐なめながら、きよろきよろ、仕事場の中を見廻した。――竹藪たけやぶを後うしろにして建てた、藁葺わらぶきのあばら家やだから、中は鼻がつかえるほど狭い。が、簾の外の往来が、目まぐるしく動くのに引換えて、ここでは、甕かめでも瓶子へいしでも、皆赭あかちやけた土器かわらけの肌はだをのどかな春風に吹かせながら、百年も昔からそうしていたように、ひっそりかと静まっている。どうやらこの家の棟むねばかりは、燕つばめさえも巢を食わないらしい。……

翁おきなが返事をしないので、青侍はまた語を継ついだ。

「お爺さんじいなんでも、この年までには、随分いろんな事を見たり聞いたりしたろうね。どうだい。観音様は、ほんとうに運を授けて下さるものかね。」

「左様でございます。昔は折々、そんな事もあつたように聞いて居りますが。」

「どんな事があつたね。」

「どんな事と云つて、そう一口には申せませんが。——しかし、貴方^{あなた}がたは、そんな話をお聞きなすつても、格別面白くもございますまい。」

「可哀そうに、これでも少しは信心^{しんじんぎ}心気のある男なんだぜ。いよいよ運が授かるとなれば、明日^{あす}にも——」

「信心^{しんじんぎ}心気でございますかな。商売^{おきな}気でございますかな。」

翁^{おきな}は、眦^{めじり}に皺^{しわ}をよせて笑つた。捏^こねていた土が、壺^{つぼ}の形になつたので、やっと気が樂になつたと云う調子である。

「神仏の御考えなどと申すものは、貴方^{あなた}がたくらいのお年では、中々わからないものでございますよ。」

「それはわからなかうさ。わからないから、お爺さんに聞くんだあね。」

「いやさ、神仏が運をお授けになる、ならないと云う事じゃございません。そのお授けになる運の善し悪しと云う事が。」

「だって、授けて貰えばわかるじゃないか。善い運だとか、悪い運だとか。」

「それが、どうも貴方がたには、ちとおわかりになり兼ねましようて。」

「私には運の善し悪しより、そう云う理窟の方がわからなそうだね。」

日が傾き出したのであろう。さつきから見ると、往来へ落ちる物の影が、心もち長くなつた。その長い影をひきながら、頭に桶かしろおけをのせた物売りの女が二人、簾の目を横に、通りすぎる。一人は手に宿への土産みやげらしい桜の枝を持っていた。

「今、西の市で、續麻うみその酈みせを出している女なぞもそうでございますが。」

「だから、私はさつきから、お爺さんの話を聞きたがつているじゃないか。」

二人は、暫くの間、黙つた。青侍は、爪で頤あごのひげを抜きながら、ぼんやり往来を眺めている。貝殻のように白く光るのは、大方おおかたさつきの桜の花がこぼれたのであろう。

「話さないかね。お爺さん。」

やがて、眠そうな声で、青侍が云つた。

「では、御免を蒙つて、一つ御話し申しましょうか。また、いつもの昔話でございませうが。」

こう前置きをして、陶器師すえものつくりの翁は、徐に話出した。日の長い短いも知らない人でなくては、話せないような、悠長な口ぶりで話し出したのである。

「もうかれこれ三四十年前になりました。あの女がまだ娘の時分に、この清水きよみずの観音様へ、願がんをかけた事がございました。どうぞ一生安樂に暮せますようにと申しましてな。何しろ、その時分は、あの女もたつた一人のおふくろに死しにわか別れた後で、それこそ日々にちにちの暮しにも差支えるような身の上でございましたから、そう云う願がんをかけたのも、満更まんざら無理はございません。

「死んだおふくろと申すのは、もと白朱社はくしゅしゃの巫子みこで、一しきりは大そう流行はやつたものでございますが、狐きつねを使うと云う噂うわさを立てられてからは、めつきり人も来なくなつてしまつたようでございます。これがまた、白あばたの、年に似合わず水々しい、大がらな婆さんでございますな、何さま、あの容子ようすじゃ、狐どころか男でも……」

「おふくろの話よりは、その娘の話の方を伺いたいね。」

「いや、これは御挨拶で。——そのおふくろが死んだので、後は娘一人の瘦やせ腕うででございますから、いくらかせいでも、暮くらの立てられようがございませぬ。そこで、あの容貌きりようのよい、利発者りはつものの娘が、お籠こもりをするにも、檻樓つづれ故に、あたりへ気がひけると云う始末でございました。」

「へえ。そんなに好いい女だつたかい。」

「左様でございます。氣だてと云い、顔と云い、手前の欲目では、まずどこへ出して、恥しくないと思いましたがな。」

「惜しい事に、昔さね。」

青侍は、色のさめた藍の水干すいかんの袖口を、ちよいとひっぱりながら、こんな事を云う。

翁は、笑顔を鼻から抜いて、またゆっくり話しつづけた。後の竹藪うしろでは、頻しきりうぐいすに鶯が啼ないている。

「それが、三三七日さんしちにちの間、お籠りをして、今日が満願ぼんと云う夜よに、ふと夢を見ました。何でも、同じ御堂おどうに詣まっていた連中の中に、背むしの坊主ぼうずが一人いて、そいつが何か陀羅尼だらにのようなものを、くどくど誦ずしていたそうでございます。大方それが、気になったせいでございます。うとうと眠気がさして来ても、その声ばかりは、どうしても耳をはなれませぬ。とんと、縁の下で蚯蚓みみずでも鳴いているような心もちで——すると、その声が、いつの間にか人間の語ことばになつて、『ここから帰る路で、そなたに云いよる男がある。その男の云う事を聞くがよい。』と、こう聞えると申すのでございますな。

「はつと思つて、眼がさめると、坊主はやつぱり陀羅尼だらにざんまい三昧さんまいでございます。が、何と云っているのだから、いくら耳を澄ましても、わかりませぬ。その時、何気なく、ひよいと向う

を見ると、常夜燈じょうやとうのぼんやりした明りで、観音様の御顔が見えました。日頃おが拝みなれた、端嚴微妙たんごんみみょうの御顔でございますが、それを見ると、不思議にもまた耳もとで、『その男の云う事を聞くがよい。』と、誰だか云うような気がしたそうでございます。そこで、娘はそれを観音様の御告おつげだと、一図いちずに思いこんでしまいましたげな。」

「はてね。」

「さて、夜がふけてから、御寺を出て、だらだら下りの坂路を、五条へくだろうとしますと、案の定じようぢよう後から、男が一人抱きつきました。丁度、春さきの暖い晩でございましたが、生憎あいにくの暗で、相手の男の顔も見えなければ、着ている物などは、猶なほの事わかりませぬ。ただ、ふり離そうとする拍子に、手が向うの口髭くちひげにさわりました。いやはや、とんだ時が、満願まんがんの夜に当たったものでございます。

「その上、相手は、名を訊きかれても、名を申しませぬ。所を訊かれても、所を申しませぬ。ただ、云う事を聞けと云うばかりで、坂下の路を北へ北へ、抱きすくめたまま、引きずるようにして、つれて行きます。泣こうにも、喚わめこうにも、まるで人通りのない時分なのだから、仕方がございませぬ。」

「ははあ、それから。」

「それから、とうとう八坂寺やさかでらの塔の中へ、つれこまれて、その晩はそこですごしたそう
でございます。——いや、その辺へんの事なら、何も年よりの手前などが、わざわざ申し上げ
るまでもございますまい。」

翁おきなは、また眦めじりに皺しわをよせて、笑った。往来の影は、いよいよ長くなつたらしい。吹くともなく渡る風のせいであろう、そこここに散っている桜の花も、いつの間にかこつちへ吹きよせられて、今では、雨落ちの石の間に、点々と白い色をこぼしている。

「冗談云つちやいけない。」

青侍は、思い出したように、頤あごのひげを抜き抜き、こう云った。

「それで、もうおしまいかい。」

「それだけなら、何もわざわざお話し申すがものはございませぬ。」翁おきなは、やはり壺つぼをいじりながら、「夜があけると、その男が、こうなるのも大方宿世すくせの縁だろうから、とても
の事に夫婦みょうとになつてくれと申したそうでございます。」

「成程。」

「夢の御告げでもないならともかく、娘は、観音様のお思おほしめ召し通りになるのだと思つた
ものでございますから、とうとう首かぶりを豎たてにふりました。さて形かたばかりの盃さかずき事ことをすませ

ると、まず、当座の用にと云つて、塔の奥から出して来てくれたのが綾あやを十疋に絹びきを十疋でございます。——この真似まねばかりは、いくら貴方あなたにもちとむずかしいかも存じませんな。
—

青侍は、にやにや笑うばかりで、返事をしない。鶯も、もう啼かなくなつた。

「やがて、男は、日の暮くれに帰ると云つて、娘一人を留守居るすいに、慌あわただしくどこかへ出て参りました。その後の淋あとしさは、また一倍でございます。いくら利発者でも、こうなると、さすがに心細くなるのでございましょう。そこで、心晴らしに、何気なく塔の奥へ行つて見ると、どうでございましょう。綾や絹は愚おろかな事、珠玉とか砂金さきんとか云う金目かねめの物が、皮匣かわこに幾つともなく、並べてあると云うじゃございませぬか。これにはああ云う気丈な娘でも、思おもわず肚胸とむねをついたそうでございます。

「物にもよりますが、こんな財物たからを持つてゐるからは、もう疑うたがはございませぬ。引剥ひはぎでなければ、物盗ものどりでございます。——そう思うと、今まではただ、さびしいだけだったのが、急に、怖いのも手伝てつて、何だか片時かたときもこうしては、いられないような氣になりました。何さま、悪く放免ほうめんの手にもかかろうものなら、どんな目に遭あうかも知れませぬ。

「そこで、逃げ場をさがす氣で、急いで戸口の方へ引返そうと致しますと、誰だか、皮匣かわこ

の後から、しわがれた声で呼びとめました。何しろ、人はいないとばかり思っていた所でございませうから、驚いたの驚かないのじやございませぬ。見ると、人間とも海鼠なまこともつかないようなものが、砂金の袋を積んだ中に、円まるくなつて、坐つて居ります。——これが目くされの、皺しわだらけの、腰のまがつた、背の低い、六十ばかりの尼法師あまほうしでございました。しかも娘の思惑おもわくを知つてか知らないでか、膝ひざで前へのり出しながら、見かけによらない猫撫声ねこなでこえで、初対面の挨拶あいさつをするのでございます。

「こつちは、それ所の騒さわぎではないのでございますが、何しろ逃げようと云う巧みたくみをけどられなどしては大変だと思つたので、しぶしぶ皮匣かわごこの上に肘ひじをつきながら心にもない世間話をはじめました。どうも話の容子ようすでは、この婆さんが、今まであの男の炊女みずしか何かつとめていたらしいのでございます。が、男の商売の事になると、妙に一口も話しませぬ。それさえ、娘の方では、気になるのに、その尼あまがまた、少し耳が遠いと来ているものでございませうから、一つ話を何度となく、云い直したり聞き直したりするので、こつちはもう泣き出したいほど、気がじれます。——

「そんな事が、かれこれ午ひるまでつづいたでございませう。すると、やれ清水の桜が咲いたの、やれ五条の橋はし普請ふしんが出来たのと云つている中に、幸い、年の加減かげんか、この婆さん

が、そろそろ居睡りをはじめました。一つは娘の返答が、はかばかしくなかったせいもあるのでございましょう。そこで、娘は、折を計って、相手の寢息を窺いながら、そつと入口まで這って行つて、戸を細目にあけて見ました。外にも、いい案配に、人のけはいはございませぬ。――

「ここでそのまま、逃げ出してしまえば、何事もなかったでございしますが、ふと今朝貰った綾と絹との事を思い出したので、それを取りに、またそつと皮匣の所まで歸つて参りました。すると、どうした拍子か、砂金の袋にけつまずいて、思わず手が婆さんの膝にさわたつたから、たまりませぬ。尼の奴め驚いて眼をさますと、暫くはただ、あつけにとられて、いたようでございしますが、急に氣ちがいのようになって、娘の足にかじりつきました。そうして、半分泣き声で、早口に何かしやべり立てます。切れ切れに、語が耳へはいる所では、万一娘に逃げられたら、自分がどんなひどい目に遇うかも知れないと、こう云っているらしいのでございすな。が、こつちもここにては命にかかわると云う時でございますから、元よりそんな事に耳をかす訳がございませぬ。そこで、とうとう、女同志のつかみ合がはじまりました。

「打つ。蹴る。砂金の袋をなげつける。――梁に巢を食つた鼠も、落ちそうな騒ぎでござ

います。それに、こうなると、死物狂いだけに、婆さんの力も、莫迦ばかには出来ませぬ。が、そこは年のちがいでございましょう。間もなく、娘が、綾と絹とを小脇こわきにかかえて、息を切らしながら、塔の戸口をこつそり、忍び出た時には、尼あまはもう、口もきかないようになって居りました。これは、後あとで聞いたのでございますが、死骸しがいは、鼻から血を少し出して、頭から砂金を浴びせられたまま、薄暗い隅の方に、仰向けあおもむになつて、臥ねていたそうでございます。

「こつちは八坂寺やさかでらを出ると、町家ちやうかの多い所は、さすがに気がさしたと見えて、五条京き極ようごく辺の知人しりびとの家をたずねました。この知人と云うのも、その日暮しの貧乏人なのでございますが、絹の一疋もやったからでございましょう、湯を沸かすやら、粥かゆを煮るやら、いろいろ経営けいえいしてくれたそうでございます。そこで、娘も漸ようやく、ほつと一息つく事が出来ました。」

「私も、やつと安心したよ。」

青侍あおざむらいは、帯にはさんでいた扇おあぎをぬいて、簾すだれの外すだれの夕日を眺めながら、それを器用にぱちつかせた。その夕日の中を、今しがた白丁はくちやうが五六人、騒々しく笑い興じながら、通りすぎたが、影はまだ往來に残つてゐる。……

「じゃそれでいよいよけりがついたらと云う訳だね。」

「所が」おきな おおきよう翁は大仰おおきように首を振つて、「その知人しりびとの家に居りますと、急に往来の人通り

がはげしくなつて、あれを見い、あれを見いと、罵り合う声が聞えます。何しろ、後うしろぐ

暗い体ですから、娘はまた、胸を痛めました。あの物盗ものどりが仕返ししにでも来たものか、

さもないければ、検非違使けびいしの追手おつてがかかりでもしたもののか、——そう思うともう、おちおち、

粥かゆを啜すすつても居られませぬ。」

「成程。」

「そこで、戸の隙間すきまから、そつと外を覗いて見ると、見物の男女なんによの中を、放免ほうめんが五六

人、それに看督長かどのおさが一人ついて、物々しげに通りました。それからその連中にかこまれ

て、縄にかかった男が一人、所々裂さけた水干を着て烏帽子えぼしもかぶらず、曳かれて参ります。

どうも物盗りを捕えて、これからその住家すみかへ、実録じつろくをしに行く所らしいのでございます

な。

「しかも、その物盗りと云うのが、昨夜ゆうべ、五条の坂で云いよつた、あの男だそうじゃござ

いませぬか。娘はそれを見ると、何故か、涙がこみ上げて来たそうでございます。これは、

当人が、手前に話しました——何も、その男に惚ほれていたの、どうしたのと云う訳じやな

い。が、その縄目なわめをうけた姿を見たら、急に自分で、自分がいじらしくなって、思わず泣いてしまったと、まあこう云うのでございますがな。まことにその話を聞いた時には、手前もつくづくそう思いましたよ——」

「何とね。」

「観音様へ願がんをかけるのも考え物だな。」

「だが、お爺さんじい。その女は、それから、どうにかやって行けるようになったのだろう。」

「どうにか所か、今では何不自由ない身の上になって居ります。その綾や絹を売ったのを本もとに致しましてな。観音様も、これだけは、御約束をおちがえになりません。」

「それなら、そのくらいな目に遇つても、結構じゃないか。」

外の日の光は、いつの間にか、黄いろく夕づいた。その中を、風だつた竹籥の音が、かすかながらそこから聞えて来る。往来の人通りも、暫くはとだえたらしい。

「人を殺したつて、物盗りの女房になつたつて、する氣でしたんでなければ仕方がないやね。」

青侍は、扇を帯へさしながら、立上つた。翁おきなも、もう提ひさげの水で、泥にまみれた手を洗っている——二人とも、どうやら、暮れてゆく春の日と、相手の心もちとに、物足りない何

ものかを、感じてでもいるような容子ようすである。

「とにかく、その女は仕合せ者だよ。」

「御冗談で。」

「まったくさ。お爺さんも、そう思うだろう。」

「手前でございますか。手前なら、そう云う運はまっぴらでございますな。」

「へええ、そうかね。私なら、二つ返事で、授さずけて頂くがね。」

「じゃ観音様を、御信心なさいまし。」

「そうそう、明日あすから私も、お籠こもりでもしようよ。」

（大正五年十二月）

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集¹」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年9月24日第1刷発行

1995（平成7）年10月5日第13刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utyama

校正：earthian

1998年11月11日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

運

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>